

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 52 回 たかが「卵」、されど「卵」～卵の話 2 題

今回は、小生が実際に体験した「卵」にまつわる話、二題。

旅館の朝食の定番メニューの一つが、間違いなく「卵」。厚焼き玉子、目玉焼き、あるいはスクランブルエッグと、和・洋共々必須アイテムと言えるかもしれない。

ある旅館で「朝食改革」のコンサルティングを実践していた。「朝食こそ、ラストチャンス！」との持論をもつ小生にとっては、つい勢い勇んでのめり込むテーマである。ここでの最大のネックは、「卵」であった。

仲居さん^{いわく}曰く...「社長、いつも朝食に生卵を出していますが、お客さん、あまり喜んでいないみたいですよー、ほら、今日も、こんないっぱい残っていますよ」といいつつ、朝食の後片付けに^{いそ}勤しんでいた。

「ちゃん、何言ってるんだ、コスト意識をもたないかんよ。卵、余るから、明日また使えるじゃないか！飯島先生も、コストの低減化をやれと言うとるがな...」

そんな意味で言った覚えはないのだが、当然仲居さんの勝ち。明朝から山盛りの生卵をシャレたざるにてんこ盛り、陶板焼きセットをつけて「お好きなだけ何個でも、お好みのお料理でお召し上がりください」...とやった。煎り卵あり、目玉焼きあり、相変わらず卵かけご飯あり。美味い^{うまい}の不味い^{まずい}ので、朝から盛り上がっていた。

東京ディズニーランド近隣の、豪華リゾートタイプホテルでの話。支配人とワイン 2 本空け、部屋へ戻った小生。寝る前に空腹感を満たそうと、自慢の 24 時間対応ルームサービスを頼むべく、メニューを見た。絶対^や痩せない小生の悪癖^{あくへき}「寝る前に、ゆで卵を一つ、マヨネーズをたっぷりつけて...」。しかし、ルームサービスメニューには「ゆで卵」が無かった。でも、「朝食メニューに卵料理はあるし、このホテルの中に、卵 1 個ぐらい、どこかにあるだろう」、わがまま極まりない、勝手な思い込みで、ルームサービスにコールした。件^{くだん}のメニューを注文する、マヨネーズをたっぷりつけて...

「えっ」と言ったきり、電話の向こうで戸惑いがあった。でも恐らく数秒の、一瞬だったと思う。「かしこまりました。すぐ、お持ちいたします。ありがとうございました...」。やがて、茹でたてのあったかい「ポイルドエッグ」が 2 個、たっぷりのマヨネーズと共に運ばれてきた。美味かったし、とても嬉しかった。満足の限りベッドに潜り込み、当然熟睡。酔っ払いながらサインした「ゆで卵代」は、1 個 800 円、翌朝チェックを見て驚きもしたが、不思議と、満足感は消えなかった。そして「ありがとう」という気持ちも、未だ^{いま}に持ち続けている。